

へ い あ ん き そ く あ こ が こ ま
平安貴族が憧れた「おぶちの駒」



だいとうこうぎょうぼくじょう
大藤工業牧場のポニー



がくしゃ ががく まい えんそう
「みちのく楽舎」による雅楽の舞と演奏

みちのくのおぶちの駒も野飼ふには 荒れこそまされなつくものかは

てんりやく ねん ごせんわかしゅう よ びとし
天曆5年(951) 後撰和歌集 読み人知らず

げんぶん
原文 美知乃久乃於布知乃己満毛乃可不尔八安礼己曾万左礼奈川久毛乃可八

わか
和歌 みちのくのおぶちの駒も野に放たれ荒れていて なつくものではない あの人を思う

かいしゃく
解釈 陸奥のおぶちの駒も野に放たれ荒れていて なつくものではない あの人を思う

わたしの心もそれ以上に荒れていて この思いが届かないかもしれないな。

787年(延暦6年)以降、蝦夷の馬を買うことを禁じる太政官符が3回も出されている。陸奥国交易馬として、平安貴族の間で珍重され話題となり、歌枕にもなったようだ。

おぶちの駒が詠まれたのが、天曆5年(951)後撰和歌集が最初で、以後、「おぶちの駒」

は、斑の動物が神の使いの聖獣として、また、馬格に優れ毛色が

美しかったことから都人の憧として、数多く詠まれていったと

かんが
考えられる。



われが名を 尾駮の駒の あればこそ なつくにつかぬ みとも知られめ

かげろうにっき ふじわらかねいえ ねん ねん へいあんちゅうき くぎょう
蜻蛉日記 藤原兼家 929年-990年 平安中期の公卿

おがさ原 尾駮の駒を なずけてぞ ゆきあふさかの 関にひきつる

きんもとうたあわ
公基歌合せ

つな
綱たへて はなれはてにし 陸奥の 尾駮の駒を 昨日見しかな

ごしゅういわけしゅう さがみ ねんころ ねん へいあんじだい じりゅうかじん ちゅうごさんじゅうろっかせん によぼうさんじゅうろっかせん ひとり
後拾遺和歌集 相模 998年頃-1061年 平安時代の女流歌人 中古三十六歌仙、女房三十六歌仙の一人

あふさかの 杉の群だち 引くほどは 尾駮に見ゆる 望月の駒

ごしゅういわけしゅう りょうぜんほうし ねん せいぼつねんふしやう へいあんじだい ひえいざん そう かじん
後拾遺和歌集 良暹法師 1068年-生没年不詳 平安時代 比叡山の僧・歌人

おぶちの駒は、「尾が斑」か？



だいとうこうぎょうぼくじょう
大藤工業牧場のポニー

みちのくのおぶちの駒も野飼ふには 荒れこそまされなつくものかは

てんりやく ねん(951) ごせんわかしゅう よ びとし
天曆5年(951) 後撰和歌集 読み人知らず

げんぶん
原文 美知乃久乃於布知乃己満毛乃可不尔八安礼己曾万左礼奈川久毛乃可八

れきしてきかなづか へんせん げんぶん お え どじだい しゃくじ あじ あ
歴史的仮名遣いの変遷;原文の於は「お」で、江戸時代に「を」と借字(当て字)を当てた。

- 1 奈良時代から平安時代は、「おぶち」。ア行の「お:お」は於・意・憶などで、ワ行の「を:wo」は小・尾・乎・遠などを語頭に置いて借字していた。
- 2 鎌倉時代は「をぶち」。ア行が「を」に、ワ行に「お」に逆転し、発音は「wo」となる。
- 3 江戸時代の契沖(1695年「和字正濫鈔」)や本居宣長(1776年「字音仮字用格」)が、仮名遣いの誤りを指摘し元に戻した。発音もどちらも「o」となり、「おぶち」に戻る。

じょうき かなづか れきし み げんぶん おぶち かまくら え どじだい
上記の仮名遣いの歴史から見ると、原文の於布知の「おぶち」が、鎌倉から江戸時代に「をぶち」とされ、「を」の借字として「尾」と当ててしまったため、「をぶち」は「尾が斑な馬」と間違って解釈されたと考えられる。「於」は平安時代以降に漢文訓読から「於いて」となったが、平安時代の原文では「於=ア行のお」で、「於布知」は尾が斑ではなく、「おぶち」と丁寧な意味を込めての接尾語と読める。斑模様の動物がなぜ崇められたか？



おぶち
尾が斑？



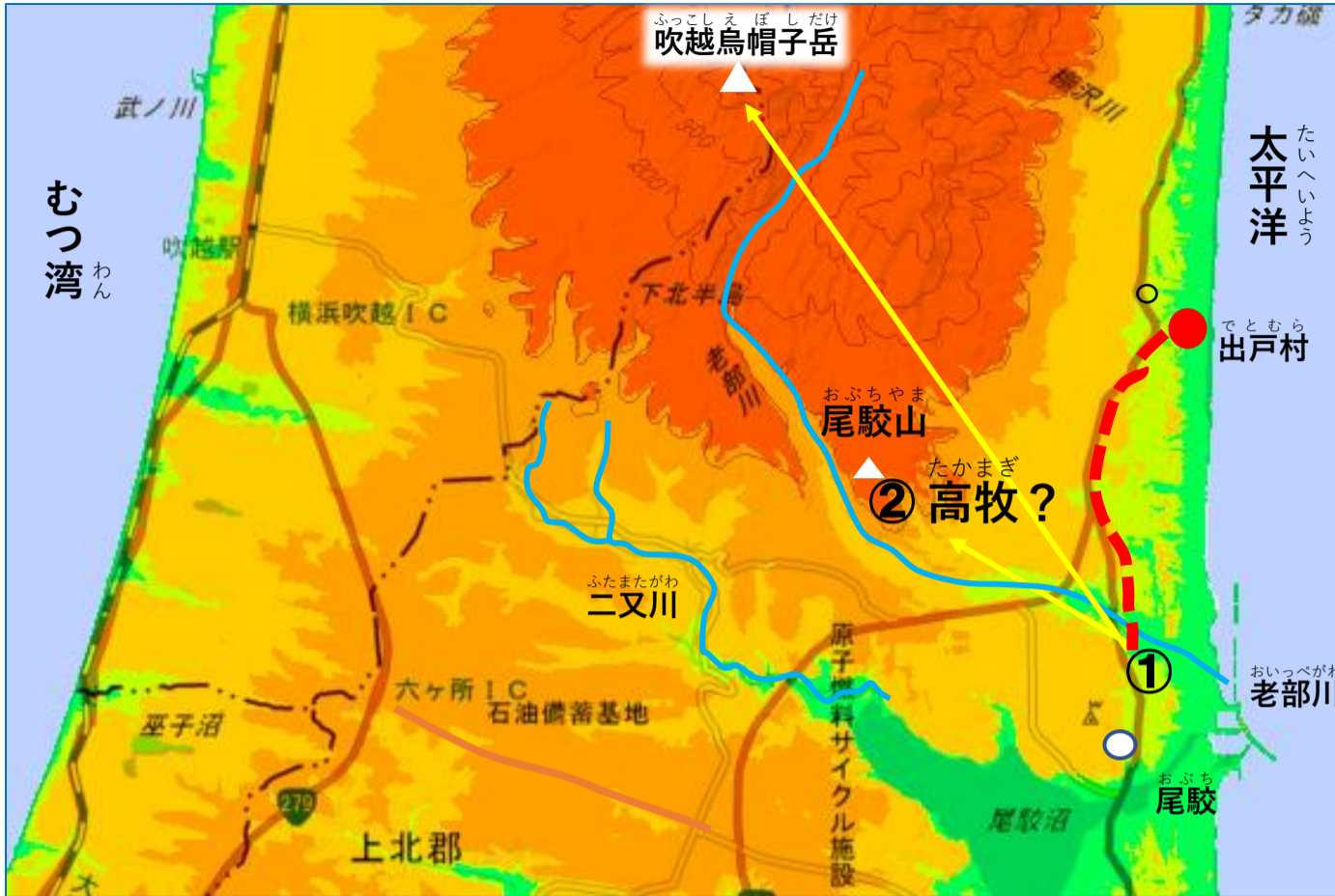
ぶち こま
お斑の駒



まだら うし(エジプト)、まだら いぬ(ペルシア)、くろぶち びゃつ こまだら
斑の牛(エジプト)、斑のある犬(ペルシア)、黒斑の白虎と斑のある麒麟及び斑馬を聖獣としていた(中国)。日本では斑の鹿が聖獣とされ、「古事記」では、スサノオは天の斑馬の皮をはぎ、神にささげている。

おぶち こま ほんしょう せいじゅう
尾駮の駒の本性は、聖獣だった。

まき おぶちの牧はどこにあったのか？



菅江真澄の肖像画 秋田県立博物館蔵

菅江真澄(1754年~1829年)
江戸時代後期の旅行家・草本学者 各地
の自然や人々の様子を歌や絵にし、旅日記
「菅江真澄遊覧記」を残した。

尾駮の牧(高牧)の想定位置 ※出典:国土地理院地図色別標高図

菅江真澄遊覧記「尾駮乃牧」寛政5年(1793年)12月

※冬の三ヶ月間の記録。10月下旬に一旦田名部を出て太平洋岸を南下し、平安時代の歌枕に出てくる尾駮の牧を目指したが、降雪により断念し再び田名部に戻ってきた日記。

「四日 …。出戸の宿の主人が語った。『…出戸の浜より未申(南西方)か戌亥(北西方)に当たっているか、たかまぎというところがあるが、高牧であろう。山の尾根のようであって、周囲に水がながれ、木立もふかく、天然のあら垣をつくっているそのなかの原なのでこういうが、むかし、そこに牧があった。ここから尻尾の毛がまだら色にはえみだれた馬が生まれたので、それをときの帝に奉ったところ、もっぱら尾駮の駒とよび、この牧を尾ぶちのみまきと称した。…。』

五日 早朝、出戸村を出立した。…水なしという小川の岸に来た。老部川という。…だんだん行くと、掛棧、地獄沢などというむこうの尾根の手前に、烏帽子山というのが、…高牧の背後に見えた。その高牧の下の方に、雪も深くない岡のようなところに、枯れ草の色がわずかにあらわれていた。それが尾駮の牧の古跡であると、人が指さして教えてくれた。…。「さあ、そこにわけいってみよう」と言うと、『…雪が深くて、ゆくことはできまい』と、進んだ。」



菅江真澄遊覧記 秋田県立博物館蔵

五日、菅江真澄が出戸村を出て老部川を渡って行くと、高牧の背後に烏帽子岳を①から見ている。現在、尾駮山であるところの②が、高牧(尾駮の牧)と考えられる。

とうほくほくぶ いほく こだいにほんこく そと

東北北部以北は古代日本国の外



東北北部と古代の柵の位置

※参照資料:「つくられたエミシ」 松本建速 (2018)

● 古代の柵(8世紀)

出典:国土地理院地図一部加筆

- 8世紀:神亀元年(724)に多賀城が、天平5年(733)に秋田城が造営され、古代日本国の領土となったと認識されていた。多賀城入り口にある天平6年(762)に建立された多賀城碑には、多賀城から120kmほど北に蝦夷国があると刻まれている。現在の平泉あたりと考えられる。
- 延暦21年(802)に胆沢城(岩手県奥州市)、同22年(803)に志波城(岩手県盛岡市)が築造される。9世紀初頭には、東北北部より南の地域では古代日本国の政治を司る機関である柵が築かれ、確実に古代日本国の領域になっていった。
- 11世紀後葉になるまで、東北北部は日本国の外だと認識され、「蝦夷」の居住域と考えられていた。北海道には、アイヌ民族につながる祖先が住んでいた。

後撰和歌集(951年)で、尾駮の駒が詠われた平安時代の10世紀は、東北北部は、まだ、古代日本国外だった。

こ ふ ん ぶ ん か た み

古墳文化の民がやってきた



ばぐ しゅつど いせき いち
馬具などが出土した遺跡の位置 ※出典：国土地理院地図

- 1 縄文時代、弥生時代の日本列島に馬はいなかった。
- 2 5世紀前後の古墳時代中期頃、馬の飼育という新しい文化が朝鮮半島から持ち込まれ、広がってゆく。各地の遺跡から出土した「馬の骨・歯」「馬具」「馬の形の埴輪」とい
みっ いぶつ せいぎ うま しいく ていちゃく あらわ
三つの遺物は、5世紀ごろに馬の飼育が定着したことを表している。
- 3 5世紀末ごろには、岩手県南部で馬が飼われていた痕跡があり、奈良時代になると、
とうほくほくぶ こくないゆうすう ばさんち とうかく こふんぶんか になて うま
東北北部が国内有数の馬産地として頭角をあらわしてくる。古墳文化の担い手が、馬
か ひろ そうげん ぼくじょう もと あおもりけん いじゅう かんが
を飼うための広い草原(牧場)を求めて、青森県に移住してきたと考えられる。
- 4 馬具出土遺跡は、7世紀代の鹿島沢古墳群(八戸市)・阿光坊古墳群(旧下田町)、8
せいぎだい たんごたいこふんぐん はちのへし せいぎだい あせいしいせき くらいしし
世紀代の丹後平古墳群(八戸市)、9世紀代の浅瀬石遺跡(黒石市)などである。
- 5 馬の飼育が短期間に広がったのは、日本には「草原の国」としての一面があり、馬の
うま しいく たんきかん ひろ にほん そうげん くに いちめん うま
成育にふさわしい環境に恵まれていたからだと考えられる。

こふんじだい かくち こふん つく ひとびと
古墳時代に各地で古墳を作っていた人々によって、
うま か せいぎころ まつきこふんぐん
馬は飼われるようになった。7世紀頃から、末期古墳群を
たみ あおもり かんが
つくる民が、青森にもやってきたと考えられる。



掘立柱付竪穴住居は馬小屋か？



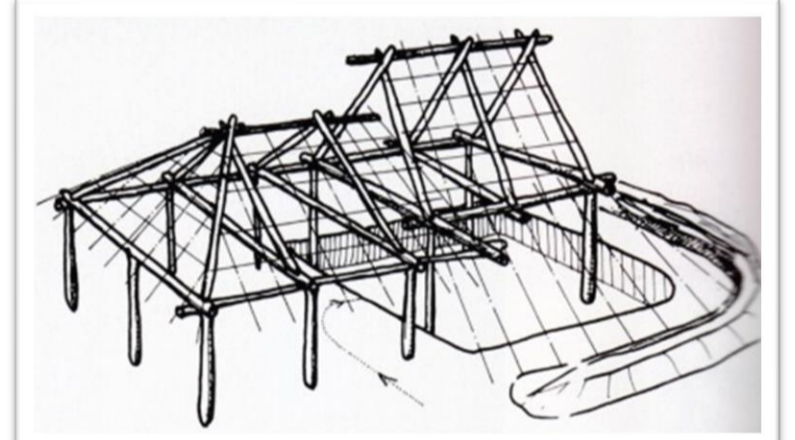
はつちやざわ いせき だい ごう ほったてばしらつきたてあなじゅうきよ ふくげん
発茶沢(1)遺跡 第205号 掘立柱付竪穴住居(復元) 9世紀から10世紀後半



はつちやざわ いせき いち
発茶沢(1)遺跡の位置



だい ごうじゅうきよあと もりど ちょうさ
第205号住居跡(盛土の調査)



だい ごうじゅうきよそうていず
第205号住居想定図

1 竪穴住居跡と掘立柱建物跡が組み合わされた構造の建物10棟が青森県で初めて確認された。掘立柱建物はカマド側にあり、煙道をおおうような形で建てられている。作業空間か馬小屋か、燻製を作っていたのかは、まだ分かっていない。



カマドと煙道の想像図

2 石組カマドは、カマドの一部が石を組んで作られているもので、煙道は地下式から半地下式の構造へ変化。半地下式煙道は、古くは5世紀後葉に、古代の牧があった長野県や群馬県北部あたりに出現。9世紀前半に角鹿市「高市向館遺跡」や9世紀後半の「中の崎遺跡」にも見られ、米代川流域から津軽の山間地で見られた。10世紀中葉以降、馬飼いの人々が、六ヶ所発茶沢にやって来たのではないかと考えられる。

3 炭化米も出土：津軽地方や岩手県北部より小粒米で、厳しい気候に適した早熟の小粒種を栽培か？鉄製の鎌先や刀子、穂摘具様鉄製品も出土。北限の線刻篋文字のある須恵器も出土している。



ほづみぐようてつせいひん
穂摘具様鉄製品



てつせい かまさき
鉄製の鎌先



せんこくへらもじ
線刻篋文字

せきたいも だれ 石帯を持っていたのは誰か？



おもてだていせき 2 く いち 表館遺跡Ⅱ区の位置



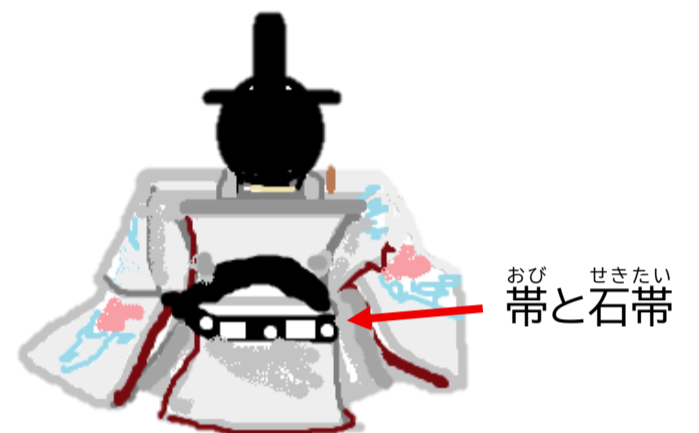
おもてだていせき こうくうしゃしん まる かたち じょうもんじだい しかく かたち へいあんじだい じゅうきよあと 表館遺跡の航空写真(○円い形が縄文時代で、□四角い形が平安時代の住居跡)



せきたい おもてめん 石帯の表面



せきたい うらめん ぎんし とめたあとがある 石帯の裏面(銀糸で留めた痕がある)



へいあんきぞく うし がわ しょうぞく おび 平安貴族の後ろ側の装束と帯



鉸具(かこ) 巡方(じゅんっぽう) 丸鞆(まるとも) 鉞尾(だび)

この帯は、束帯装束のときに用いられる黒皮製の帯。通常のベルトのようにバックルでとめていたが、平安時代末期以降、前を紐で結びとめる方式になり、背中に当てる部分と結びの余り部分を皮で作った二部構成となった。

この石帯は、青森県教育委員会が、昭和47年6月～7月に行った試掘調査で出土。これは、平安京で作られたもので、石帯の研究者で第一人者である田中弘明氏は、以下のように考えている。

- 1 「三位または四位の参議以上が許された白玉帯と、考えられる。」
- 2 「表館の人物が、国司や鎮守府將軍を通して京へ上り、そこで貴族から白玉帯を賜与されたのかもしれない。」

※埼玉県埋蔵文化財調査事業団 田中弘明氏「尾駱の駒・牧の背景を探る」(2018)本文より抜粋